

氏名	謝 静
学位の種類	博士(文学)
報告番号	甲第525号
学位授与年月日	2020年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	八代集における形容動詞について
審査委員	(主査) 平井 吾門 (立教大学大学院文学研究科准教授) 井野 葉子 (立教大学大学院文学研究科教授) 沖森 卓也 (立教大学名誉教授)

## I. 論文の内容の要旨

### (1) 論文の構成

#### 序 主題と構成

- 1 主題                      2 構成

#### 第1章 研究史と概要

- 1 研究史                      2 「形容動詞+けり・ける・けれ」  
3 「～がほなり」型形容動詞

#### 第2章 個別語彙の研究

- 1 「あだなり」              2 「あはれなり」              3 「さやかなり」  
4 「そらなり」              5 「つねなり」              6 「はつかなり」  
7 「はるかなり」            8 「ほのかなり」            9 「まれなり」

#### 結び

#### 参考文献

### (2) 論文の内容要旨

本論文は、『古今和歌集』から『新古今和歌集』までの勅撰集、いわゆる八代集の和歌に用いられた形容動詞について、研究するものである。一般に古典和歌では、形容動詞があまり用いられないことが、先行研究において指摘されている。しかしながら、その理由については、抽象的な推測が行われるに留まっていた。申請者は、八代集における形容動詞の用例を調査することによって、一定の用例数を示す形容動詞が存在することを指摘する。そして、その形容動詞の中から9語を取り上げて、その使用の傾向を全用例の検討を通して把握し、それらの語がなぜ古典和歌に相対的に多く用いられたのかを考察する。まず、序では、八代集における形容動詞を研究対象とする意義、ならびに論文の構成を示す。第1章では、第1節において、古典和歌における形容動詞の用例が少ないこと、ならびにその理由に関する先行研究の指摘を、八代集における形容動詞の用例調査によって確認するとともに、相対的に多い用例がみられる形容動詞が一定数存在することに注意を喚起する。第2節では、形容動詞に詠嘆の助動詞「けり」が接続した形を対象とし、第3節では、「～がほなり」型形容動詞を対象として、八代集における使用頻度や詠み込まれ方の特質を明らかにする。第2章では、全体を9節に分ち、個別の単語の研究として、八代集で相対的に多く用いられている形容動詞9語を取り上げ、それぞれ全ての用例を先行の注釈を踏まえながら分析し、それに適宜分類・整理を加えながら、それぞれの語がどのように和歌に用いられているのか、その実状と傾向を考察する。結びは、主に第2章の個別形容動詞ごとの八代集における用例についての検討結果を踏まえ、そこから看取される全般的な傾向を具体的な用例に言及しつつまとめて示すとともに、今後解明すべき課題と研究の方向性を提示する。

## Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

本論文は、八代集の和歌における形容動詞の用いられ方について、個々の語詞の用例に即して、具体的に分析、検証した論文である。従来の日本語学研究において形容動詞は、その成立や変遷に関心が注がれるとともに、語彙の使用分布を数値化して統計的処理を加える研究方法が盛んに用いられてきたため、用例数の少ない和歌の形容動詞は統計的処理になじまず、ほとんど手つかずの状態であった。こうした研究状況に対し、申請者は、八代集における用例数の調査を通して、先行研究が示す通り、全体としては形容動詞の用例は少ないものの、中には相対的に多く用いられている形容動詞が存在することを指摘する。そこから申請者は、個別の語詞を和歌の用例に即して分析し、その使用の実状と傾向を把握することが必要であるとの認識のもとに、用例の多い9語の形容動詞の詳細な分析を行い、これらの語詞と和歌の親和性を具体的に指摘する。合わせて、詠嘆の助動詞「けり」を伴って用いられた形容動詞と、「～がほなり」型形容動詞用例についても検討する。これは、個別語詞の考察を越えた、全般的な傾向を把握するために意義深い研究である。

### (2) 論文の評価

先行研究では、形容動詞が古典和歌で用いられなかった理由について、品詞としての成立が新しかったためだろうという、抽象的な推測が行われて来た。本論文が単語の数は少ないものの、和歌に親和性を有する形容動詞が存在することを明らかにしたことは、従来の認識を大きく相対化するものであり、この点にまず大きな意義が認められる。対象を古典和歌全般に広げず、八代集に絞ったことも、従来の形容動詞の研究が、専ら平安時代の著名な散文作品について行われて来たことを踏まえれば、散文と和歌を比較する上で、妥当な選択であったと考えられる。形容動詞という品詞を意識しながら、多くの和歌を読み解き、用例分析を広く行ったのも、本論文が初めてで、そこにも画期的な意義が見出される。個々の単語や表現を、和歌の主題、発想、修辞などの観点から具体的に、詳細に分析した結果、和歌に相対的に多く用いられる形容動詞の傾向が可視化されたこと、具体的には、①「さやかなり」「あだなり」「ほのかなり」「そらなり」「あはれなり」について、和歌の対象や主題との親和性が看取されること、②「はつかなり」「ほのかなり」「まれなり」「はるかなり」「あだなり」について、欠落感を示すという共通性があり、それが「さやかなり」「つねなり」+打消・願望表現の用例と合わせて、古典和歌の特質に合致すること、③人と自然を重ねて詠んだ歌の用例が多くみられること、が指摘された意義は大きい。細部の分析においても、たとえば、「あはれなり」が、強意の係助詞、詠嘆の終助詞と共起する用例が多いことの指摘など、和歌研究としても意義深い。形容動詞が総体として古典和歌に用いられなかった理由は、依然として不明であるなど、残された課題も存在するものの、統計的な処理の観点から行き詰まりを見せていた研究状況を、個別の語詞の用例研究によって打破してみせた本論文の意義は大きく、古典和歌と形容動詞の関係をさらに考察する上で、揺るぎない基盤を築いたものとして高く評価できる。